

米国大学図書館における オーラルヒストリー収集の現在

—UCLAの事例を中心に—

小林 磨理恵

本稿では、米国におけるオーラルヒストリーの収集と公開の現在を、主にカリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLA）の事例から考察したい。

●米国の大学図書館における オーラルヒストリーの収集

米国の大学図書館におけるオーラルヒストリー収集の取り組みは、一般市民の生きた経験を収集・蓄積する点で歴史を記録する任務を負い、地域研究や歴史研究の進展に広く貢献してきた。その歴史は古く、歴史家のH・バンクローフトが、米国西海岸に住む様々な人物への聞き取りを纏め、カリフォルニア大学バークレー校に寄贈したのは一八六〇年代に遡る。その寄贈は、後にバンクローフト図書館と名付けられた同大学図書館の重要な所蔵資料となった。

米国におけるオーラルヒストリーの収集は、一九六〇年代以降、社会運動と連動したことにより飛躍的に拡大した。白人のエリート男性を主体とした米国史に異議を唱える、声なき「普通の」人に声を与える方策として、ネイティブアメリカンやアフリカンアメリカン、また、女性運動や労働運動の関係者に対するインタビュー①がさかんになされた（参考文献①）。インタビュを録音したカセットテープやその書き起こし（トランスクリプト）の保存・管理を担ったのは図書館やアーカイブズであった。今日では、インタビュの音声と書き起こしをウェブサイトで「発信」する大学図書館の事例も多く存在する。

例えば、バンクローフト図書館のリージョナルオーラルヒストリーオフィスのほか、コロンビア大学

図書館のコロンビア・オーラルヒストリーセンター、ミシガン州立大学図書館のG・ロバード・ヴィンセント・ヴォイス図書館、ケンタッキー大学図書館のレイ・B・ナン・オーラルヒストリーセンター等が挙げられる。

●UCLAの事例

ここでは、図書館にオーラルヒストリー研究センター（以下、OHRC）を設置し、インタビュの収集とウェブサイトで公開を精力的に行うUCLAの事例を取り上げる。本節は二〇一三年一月に実施したOHRCのジェーン・コリンズ氏への聞き取りに基づくものである。

(1) OHRCの概要

UCLA図書館のOHRCは、オーラルヒストリーのインタビュを通じて南カリフォルニア

やロサンゼルス市の歴史を記録することを目的に、一九五九年より五〇年以上活動を継続している。アフリカンアメリカンの歴史、アジアアメリカンの歴史、ラテンアメリカンの歴史、社会運動等、計一九の主題に分類されたインタビュの音声と書き起こしはウェブサイトで公開され、世界中からアクセスすることが可能である（<http://oralhistory.library.ucla.edu/>）。各インタビュには、ライブラリアンが、タイトル、主題、インタビュの受け手（以下、語り手）と聞き手の氏名、作成年などのメタデータを付与する。また、語り手の経歴やインタビュの状況説明を文書で掲載し、インタビュの背景や文脈に関する情報を提供している。

(2) インタビュの実施

語り手には、すでにあるインタビュコレクションのテーマのいずれかに精通した人物を選定することが多い。あるいは、特定のテーマに関係する人物を複数選定し、インタビュをシリーズ化することもある。他のインタビュと関連しない単独のインタビュよりも、同一のテーマに集められた複数の語り手のインタビュの

方が、そのテーマの背景を多角的に捉えやすく、インタビュー間の関連も明らかに史料としての価値が上がると考えられる。そのため、図書館等がインタビューを体系的に管理することの役割は大きい。

聞き手は、OHR CのスタッフやUCLAの大学院生が担当が、インタビューのテーマに詳しい人物を聞き手として雇うこともある。語り手の語る歴史の背景を把握し、的確に質問することは至難の業である。聞き手のインタビュースキルを養うために、OHR Cはセミナーを実施している。

現在、インタビューの録音はレコーダーで行われる。録音記録は、CDなどの記憶媒体に複製せずに、カリフォルニア大学のサーバーにアップロードする。カセットテープに録音されたかつての音声記録は、デジタル化してウェブサイトにアップロードした一部を除き、大部分は複製せずに保存箱に保管している。

他機関の試みとして、コロンビア大学図書館は重要人物のインタビューのビデオ撮影を、学内のスタジオで行っている。また、カリフォルニア州立大学ロングビーチ

校図書館では、オーラルヒストリーの記録方法として、伝統的に行われてきた書き起こしではなくタイムログを記録して公開している。これは、語りの内容に、それが語られた時(何分何秒)を加えて記述する方法で、録音を再生する際、あるトピックが語られた特定の時点を選びやすくしたものである。デジタル録音だからこそ可能な新たな方法である。

(3) 公開をめぐる問題

インタビューの際重要になるのが、インタビューの音声と書き起こしをウェブサイト上で公開することへの同意書を、語り手から得ることである。これは、インタビューの著作権を含む全ての権利をカリフォルニア大学理事に譲渡すること、また、インタビューが研究や教育等の目的に使用されることを承諾することに対する語り手の同意を明確にする書面である。

同意書には、語り手が、すぐに公開を認めるものと、「自分の死後」のように一定期間を経た後に公開を認めるものがある。後者が示唆するように、ウェブサイトでの公開を前提としても、インタビュー後に語り手が公開に難色を示し、同意書に署名を得られな

いことが少なからずある。その場合、インタビューは保存のためにサーバーにアップロードするが、ウェブサイトで非公開にしている。また、書き起こしについては秘密にしたい箇所のみ除いてウェブサイトで公開するか、あるいは書き起こしの全文の公開に同意が得られない場合、短いインタビューの記録を紙媒体で保存し、利用者の求めに応じて閲覧に供するという。

●「私的情報」の発信

UCLAの事例にも明らかのように、今日のオーラルヒストリーの収集は、「歴史の声」を集め蓄積するという当初の目的を重視しながら、インターネットを介したその発信を強く意識している。

「私的」な経験や「私情」を含むインタビューを公開する場が、図書館の限られた(あるいは守られた)空間からウェブサイトという無限の世界に転じたことで、オーラルヒストリーと図書館との関係は、新たな局面を迎えた。ウェブサイトを利用した効果的な情報発信の意義は指摘するまでもない。しかし、ウェブサイト上での公開

は、すなわち世界中の不特定多数の人々の目と耳に触れることを意味し、広範囲への公開を前提とすることによる語り手自身の(無)意識的な語りの制限や、特定されない人物によるインタビューの悪用などといった問題も危惧される。公開を望まない語り手の意思を尊重しながら、個人の貴重な経験を蓄積していくためには、一定の制約を課したうえで利用に供するという従来の図書館の機能が重要になる。図書館は、多様な学術情報のグローバルな発信を期待される一方で、発信すべき情報の整理とその見極めに、なお一層の慎重さを求められている。

(こばやし まりえ/アジア経済研究所 図書館)

《参考文献》

- ①Charlton, Thomas L., Lois E. Myers, and Rebecca Sharpless, eds., *History of Oral History: Foundations and Methodology*, Altamira, 2007.